霊的治療と信仰　霊的治療とキリスト教信仰における病と救いについて　第8部

KOIZUMI Tomomi
小泉友美

目次

霊的治療と信仰　17 世紀叙事詩のマグダラのマリア像を通して　. . . . . .　1

霊的治療と信仰　17 世紀叙事詩のマグダラのマリア像を通して

ジャン デマレ ド サン = ソルラン Jean Desmarets de Saint - Sorlin (1595-1676) はフランス 17 世紀の劇作家で、宰相リシュリュー (1585-1642 カトリック教会の聖職者であり、フランス王国の政治家でルイ 13 世の宰相) をパトロンとして持ち、リシュリューの命を受けて多くの戯曲を作りました。マグダラのマリアは、17 世紀フランスにおいての民間信仰においてのお気に入りの人物で、この “マグダラのマリアまたは恵みの勝利 Marie Madeleine ou le triomphe de la grâce” (1669 年刊) において、七つの罪源が強調され、キリストの出会いによって回心して行くテーマを簡潔に紹介してゆきたいです。

この作品" マグダラのマリアまたは恵みの勝利" は、3700 行にわたる長編叙事詩 (poésie lyrique) であり、罪と誘惑のテーマからなる 4 編の詩と、神聖さとキリストキリスト教の美徳のテーマ 6 編の詩で構成されています。古代ギリシャ神話の寓話とキリスト教スピリチュアリティーがごちゃ混ぜに組み合わせさった、ユニークな百科事典的な作品となっています。17 世紀バロック文学の力強さ、壮麗さが、絶望 désespoir, 乾燥 sécheresse, 情熱 passion, 夜 nuit, 空虚 vide 等の言語表現を通して、詩的絵画世界が展開されてゆきます。キリスト教の七つの罪源に関する言葉とマドレーヌの回心は、例えば虚栄は、マドレーヌの優美な仕草等で表現され、怒りは悪魔に取り憑かれたマドレーヌの叫び声等で表現されています。

七つの罪源とは、キリスト教精神史において重要な語類です。この七つの罪源とは、虚栄、嫉妬、怒り、悲嘆、強欲、貪食そして淫欲です。4 世紀のエジプトの修道士であるポントスのエウォグリオス (345-399 4 世紀のキリスト教の神学者であり、エジプトの砂漠で 16 年間の隠遁生活を送り、多くの著作を残しました。ポントスのエウォグリオスはその著作" 修業論" の中で、霊的修行を実践する修道士を悩ませる 7 つの大罪を紹介しました。この七つの罪源に対極にあるものが 4 つの美徳であり、思慮深さ、正義、勇気、そして節約です。

このジャン デマレ ド サン= ソルラン著作の" マグダラのマリアまたは恵みの勝利" において、七つの罪源の内、虚栄、悲嘆、淫欲の罪 3 つが強調されています。キリスト教霊性において、虚栄は金銭や財産、うわべや体歳を整える事にこだわる事で生まれる欲であり、霊的堕落に繋がるとされました。怒りの罪は制御出来ない復讐心や怒りそのものであり、人間を破壊的な行動に導きます。この怒りの罪は、元来、光の天使であったルシフェルがカミへの怒りによって、天へ反逆した事で天国から追放された事に由来してい

ます。この反逆の態度が怒りを表現し、怒りはカミの慈悲に反する行為とみなされました。悲嘆の罪とは、本来、カミから贈られたいのちに感謝して、喜びを持って生きなくてはならないのに、不満から来る悩みに振り回されて暗い気持ちを嘆く事で、カミへの恩意を忘れて、神聖な明るさから離れてしまう事です。淫欲とは、性は本来美しい、いのちを繋いでゆくエネルギーの贈り物ですが、節度を欠くと魂の堕落に繋がります。キリスト教霊性においては、性的な逸脱が個人の倫理的堕落や社会的混乱の原因となります。

このジャン デマレ ド サン= ソルランの " マグダラのマリアまたは恵みの勝利" において、虚栄は傲慢さと情熱に繋がるものであり、この傲慢な精神は至上のカミに反抗するもの L'orgueil est contre la Suprême - bonté であり、すべての罪の本源 Tout péché sert l'orgueil passion とみなされています。
この虚栄は、マドレーヌの回心前の虚飾の生活、華美な化粧と装い、ダンスへの関心として表現されています。罪源は、七つの悪霊としてマグダラのマリアのこころを失望、怒り、憎しみという負の感情を溢れさせて、苛まさせます。

淫欲の罪とは、マグダラのマリアが数多くの愛人に囲まれて、官能と悦楽を得て、遊び、笑い、踊りと豪華な饗宴 le festin somptueux に日々を費やす事、愛の情念によって絶えなき嘆き、その両眼は悦楽を語り、口からは耐えなき戯言、そのこころは欲望によって驚かされています。その感情のざわめきは、荒々しい波 les flots combattus として押し寄せて来て、過激な愛 l'amour excessif ,
危険な罪 dangereux péché となります。

悲嘆の罪は、悦楽の日々を過ごして、いつか、ぽっかりと虚ろな穴がこころに空いてしまったマドレーヌは、深い淵 la grande abîme の中の悲惨、果てしない憂い事を感じました。この深い哀しみとは、死ぬ様な苦痛を心身に覚えて、何も見る事が出来無くなり、何もこころに感じる事が出来無くなり、ただひたすらに歩を進めて、嘆くままに。その嘆きによって、いつしか心身に何の情熱も覚え無くなってしまいます。

キリストの救い　マドレーヌの霊的治療

マドレーヌの霊的治療は、この詩の中でキリストの明るさ (光) によって救われます。マドレーヌがキリストに眼差しを向けて、長い髪で足を拭い、涙を流して、香水をかけて、キリストを讃えて罪を悔い改めると、キリストはマドレーヌを両腕で抱き抱えます。キリストの愛がマドレーヌの心臓を貫いて、力と視力がよみがえり、すべての感覚が戻って来ます。そして、激しい力が魂に満たされてゆき le zèle brûlant,leurs âmes sont remplies, 様々な言語が口から溢れてゆき、カミの恩恵が罪深き土地を清めてゆき、罪人達の囚われている牢獄の扉は開かれてゆき、キリストの死と、キリストのその苦しみによって、そしてキリストの血が世界へと飛び散って、福音の教えが全世界へと広められてゆきます。このキリストの信仰に頼る事が、マドレーヌの霊的治療、そして、霊的救いであると、この詩は紹介しています。

完

霊的治療と信仰　霊的治療とキリスト教信仰における病と救いについて　第8 部

著　者　　小泉友美 Koizumi Tomomi

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社